

沖永良部島における民間信仰のカミ

The Gods of the Folk Belief in Okinoerabu Island

高橋孝代
TAKAHASHI, Takayo

キーワード：カミ、神、アニミズム、沖永良部島

I はじめに

奄美・沖縄には様々な形態の民間信仰が息づいている。琉球弧の同一文化圏とみなされている島々でも、奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島でそれぞれ独自性もあり、また反対に、共通する信仰の形もある。

筆者は奄美諸島に位置する沖永良部島を主な調査地としているが、この夏（2015年7月）石垣島の宮良集落で豊年祭を見る機会があった。アカマタ、クロマタと呼ばれる二体の来訪神が他界から訪れ、集落の人々に豊かさをもたらすというこの厳かな祭りには驚かされた。沖永良部島出身である筆者でも想像もしなかった「カミ」の姿を目にした。来賓の市長や祭りの責任者が挨拶でしばしば「ニーロウのカミサマ」という言葉を口にし、カミを迎える態度に敬意を感じた。屋外の何気ない広場を、この上なく神聖な空間へと変えたこの神事に、不思議な魅力を感じた。そして、人々の呼ぶところの「カミサマ」とは何なのか、これまで調査地としてきた沖永良部島では「カミ」はどのような存在なのか、改めて興味を持った。

奄美・沖縄という地域に限定すれば、祭りや儀礼研究を介して、民間信仰に関する報告は少なくない。柳田國男が、1921（大正10）年1月に沖縄を訪問した際の成果を『海南小記』に発表してのち、中央でも盛んに沖縄の研究が行われるようになった。柳田の沖縄での体験を聞いた折口信夫はこれに触発され、同年7月から8月にかけてと、さらに2年後1923（大正12）年にも沖縄を訪問し、そこで、「海の彼方にある他界」から訪れるカミを迎える祭りを目の当たりにした。折口は、他界から一定の時期に必ず訪れるカミを「まれびと」と呼び、現世に幸いをもたらすという考え方に、日本の古代信仰の原点が

あると考えた。その後、民俗学においては、奄美・沖縄は日本文化の原点として、これまで多くの研究者の注目を集めてきた。

だがこのような民間信仰における「カミ」と呼ばれる霊的存在の観念を追求した研究は多くない。カミの観念を考察した先行研究としては、岩田慶治の一連の業績がある。岩田は東南アジアを主な調査地とし、現地の人々の原初的な霊的存在をアニミズムの「カミ」と捉え、一神教や多神教の「神」と区別するために、カタカナで「カミ」と表記した。鈴木正崇も「アニミズムの地平」で言及しているが、岩田ほどアニミズムという言葉にこだわった日本人研究者はいないであろう。岩田のアニミズム論の根源にあるのは、カミと神の区別である。出没去来の時を定めないアニミズムのカミから、名前を持ち儀礼や教義を身にまとう「神」へと進化の図式「カミ以前→カミ→神」を設定し、これを逆転して「神→カミ→カミ以前」へと遡及する往復運動が原点にある。そうすることによって、岩田はカミの発端、カミの見える場所を探り、人間の生き方を考え直そうとした。

岩田のカミ観念は、東南アジアをフィールドとして構築されたものであるが、琉球弧の島々の文化における「カミ」はどのようなカミなのか。本稿では、岩田のカミ観念を参考にしつつ、奄美・沖永良部島の人々の言うところの「カミ」の観念を考察する¹⁾。

II 用語の定義 —アニミズム、カミ、神—

まず本稿の鍵概念である「アニミズム」、「カミ」、「神」を定義する。アニミズムとは、タイラーが『原始文化』（Tylor 1871）で最も原初的な宗教形態として提唱した概念である。動植物から無生物にいたる森羅万象には、靈魂が宿るとする考え方で、ラテン語で生命や靈魂を意味する anima にちなんで命名された。一般に「霊的存在

(spiritual beings) への信仰」と定義されている。霊的存在とは神霊、精霊、死霊、祖霊などをさす。

タイラーは、19世紀の進化主義の立場から、原始宗教や未開宗教はアニミズムの段階で、次第に靈魂が機能分化し靈魂が宿主を離れて独立個性や居所を持ち、一定の姿をとる「精霊 (spirits)」となりさらに人格が進むと多神教の「神々 (gods)」、最後に唯一絶対の「神 (God)」となる宗教の進化を提唱した。

ここで岩田慶治のいう「アニミズムのカミ」について整理しておきたい。岩田は『カミと神』で以下のように説明している。古代日本人を支配した超自然の霊的存在には、三省堂版『時代別国語大辞典 上代篇』によると、^ち魂、^{たま}魂、神があり、^ち魂が最も古く、その次に^{たま}魂、そして神が最も新しい。魂の用例は『万葉集』にも痕跡がなく、次いで古い霊的存在である^{たま}魂の解釈を小学館の『日本国語大辞典』にみると、それは「人間、さらには広く動植物に宿って心の働きを司り、生命を与えている原理」とあり、それはまた、身体を離れて存在し、身体が亡びたあとも存在すると考えられている場合が多いという (岩田1989: 233)。

「神」について同じ辞典によると、神とは宗教的、民俗的信仰の対象で、世に禍福をくだし人間に加護や罰をあたえる霊威で、古代人が天地万物に宿り、それらを支配していると考えた存在であるという。自然物や自然現象に神秘的な力を認めて畏怖し、それを信仰の対象としたものとされる。神は神話の人格神としてあらわれ、天皇や天皇の祖先を指していることがある。また、一般人でも死後神社に祀られて神となることがあるとされる (岩田1989: 233-234)。岩田はこれらの定義をもとに「^{たま}魂、^{たましい}魂はいわゆるアニミズムふうな靈魂観念であり、神は民俗、あるいは民俗宗教のなかの靈魂観念であるらしい」(岩田1989: 234)と述べ両者がくっきりと二分されているわけではないが、ここでは「^{たま}魂、^{たましい}魂を含む日本人にとっての原初の靈魂観念を片仮名でカミと表記し、そのうち歴史的・文化的に発展した形態を漢字で神と表記する……」(岩田1989: 234)と「^{たま}魂、^{たましい}魂、カミのグループと神とに大別して考えていくことにする」(岩田1989: 234)とある。

このような概念を参考に筆者は、奄美・沖縄の民俗概念にそって、本稿で使用する「神」と「カミ」の語を次のように定める。一神教、多神教の神を漢字で「神」、それ以外の奄美・沖縄の人々がいう民間信仰のカミ・カミサマを片仮名で「カミ」と表記する。その際、岩田が「カミ」という言葉に含めている「^{たま}魂、^{たましい}魂」や「精霊」は、筆者は「カミ」という言葉には含めない。奄美・沖縄では「マブイ」という人間の魂・靈魂のことを示す民俗語彙があり、カミとマブイが指し示す対象には相違がある。

また、「カミ」の観念を際立たせるためにも、精霊などの霊的存在とは、本稿では区別して捉えたい。

Ⅲ 沖永良部島の信仰の現在

はじめに、沖永良部島の信仰の概要を述べる。奄美・沖縄はしばしば「カミガミの島」と形容されるように、さまざまな「カミ」の存在が肯定されている。沖永良部島も他の島々にみられるように「カミガミ」が信仰に息づいている。それらは、ニライカナイ信仰、オナリ (姉妹) ガミ信仰、アニミズム、祖先信仰、シャーマニズムなどに息づくカミガミである。ニライカナイ信仰は、海の彼方あるいは地底に異郷があり、そこからカミが訪れ豊穡をもたらすと考えられている信仰で沖永良部ではニルヤカナヤともいわれた。また、オナリガミ信仰は、姉妹にはその男兄弟に対し霊的優位性があり、男兄弟を守護する存在であるとする信仰である。現在これらの信仰は、概して薄れる傾向にあり、40代以下の年齢層にはその言葉さえ耳に新しいであろう。しかし、アニミズム、祖先崇拜、シャーマニズムは沖永良部島の人々が近代化を志向し、多くの伝統行事を廃止してきた歴史的経緯の中でも根強く生き残ってきた民間信仰である。特に祖先崇拜は、毎朝の先祖棚へのお茶とご飯のお供えから一日が始まる島民にとって日常生活の単位で実践されている信仰といえよう。

これらの民間信仰の他に、沖永良部島には、近年多くの宗教団体が支部を設けている。カトリック系、プロテスタント系合計5つのキリスト教教会、その他エホバの証人、創価学会、天理教、日蓮宗の沖永良部島支部がそれぞれある。これらの新たな宗教が沖永良部島に普及し始め、従来のユタ信仰などの軋轢も生んでいる。家族内、親族内でもそれぞれ信仰、宗教の違いが目立ちはじめ、葬式など儀礼の執り行い方についてしばしば意見の対立がみられる。外来宗教の普及により、異なる信仰、宗教をもつ人の間で宗教の話はタブーとなりつつある。

Ⅳ アニミズムとその先

既に述べたように、アニミズムは森羅万象に宿る靈魂の存在を認める信仰である。タイラーは、アニミズムは二種類の霊的存在の観念で成り立っている、と考えた。一つは樹木や岩石など自然界の森羅万象に宿るとされる「精霊 (spirits)」であり、もう一つは人間に宿るとされる「魂・靈魂 (souls)」であるという。

本稿ではこの概念を参考に、まず、人と人以外の自然物に分けて考えてみる。以下では、自然物の^{たま}魂、^{たましい}魂が、原初的な段階のから発展した形として表出されている例

を、カミ以前あるいはカミ近辺の霊的存在と考える。奄美・沖縄に限らず世界の他地域でもしばしば信仰の対象となる石・岩石と樹木が沖永良部でどのように捉えられているか紹介する。

1. 石・岩石

石は自然物の中でも無機物で、生命をもつものではない。そのような石を、単なる無機物ではなく特別な物として扱う場合もしばしばある。日本本土にも、巨岩や特殊な形の石に霊的存在を認め御神体として信仰する「磐座」が神社の境内のあちこちで見受けられる。奄美・沖縄に特徴的な石・岩石信仰の一つに「石敢當」がある。悪霊の侵入を防ぐために、道路の突き当りやT字路に「石敢當」と刻まれた石がたてられている。中国文化の影響と言われるこの石敢當文化は、沖縄本島に多く見られ、那覇市の国場や与儀など小さな道が細かく入り込んでいる地域では、至る所に立っている。沖永良部島では戦後少なくなり、和泊町内に5基確認できる程度である。また、悪霊払いのために家屋の正面に目隠しのように立てられている石の壁、「ヒンプン」も、琉球弧の島々を通して、しばしば見受けられる。

沖永良部島に特徴的なのは、「ハミイシ」と呼ばれる聖なる石である。ハミイシは「神石」の方言で、民家の庭先にあるもの、路傍にたたずむ石など様々である。力石ともいわれ、かつては各集落にあり、若い男性の力比べに使用されていたというが現在では限られた集落に見受けられるに留まる。それらのハミイシ・力石には伝承されている物語やいわれがある。

例えば、和泊町の和集落の畑の真ん中に突然、巨石がある。その石には大きな足跡の形をした窪みがある。それは、伝説上の巨人「わん太郎」の足跡だと言われている。わん太郎は14世紀頃の三山時代に島主であった世の主を守った四天王の一人とされ、巨人のように大きなわん太郎が越山から一跨ぎに和に帰った時についた足跡とされる。和集落では、「わんたろう」の足跡はTシャツのデザインに起用されたり和集落のチーム名となったりと伝説上の人物が集落のシンボルとして今に生きている。

また、知名町の芦清良集落の巨大な石の物語は次である。フーメマチブタという男勝りの女性がいたが、ある日集落の男性たちから力比べを挑まれた。彼女は遠く離れた海岸にあった巨石を頭に乗せて芦清良まで運び男たちの度肝を抜いたと言われる。その後、彼女は男性たちが献上した神酒を飲んで神がかりの怪力を失ってしまったという。この石は、集落の若者たちの男っぷりを試す力石として存在感を示してきたが、現在ではフーメマチブタの子孫の墓地で大事に保存されている。その他、大城集落、瀬名集落、内城集落、畦布集落に力石がある。

また近代までは盛んであったウーマガナシ（竈のカミ・火のカミ）信仰の名残で、その依り代とされる三つの巨岩が喜美留集落の琴平神社に、そして下城集落の世の主神社にも三つ石がハミイシとして存在する。

また、石はもとからあった場所から移動させてはならないと信じられ、海岸などから石を持ち帰った人がそのせいで不幸な目にあった、という話をしばしば耳にする。石には石のあるべき場所があると考えられている。

奄美・沖縄地方において、石・岩石に関する信仰の一つとして、注目しておきたい石に、境界石・ニールン石がある。海の浅瀬にある大きな石や岩で、海の彼方にある他界、ニライカナイとこの世の境界にある。来訪神がニライカナイからこの世に訪れる際に初めに降り立つ場所であり、奄美大島の秋名集落で行われる豊年祭、「平瀬マンカイ」でもこの巨岩の上で神事が行われている。沖永良部島では、現在このような境界石は認められない。

奄美・沖縄には、現在も石・岩石に何らかの聖性を認める「聖なる石」信仰が生きており、沖永良部には石・岩石にちなんだ話が石と共に伝承されている。

2. 樹木

次に樹木を考えてみる。沖永良部島にはヒヌムンと呼ばれる木の精霊が信じられている。島の方言でヒは「木」、ヌは「の」、ムンは「モノ」という意味である。折口信夫は霊で悪いものがモノになるという。「物の怪」のモノである。奄美・沖縄の島々に共通の霊的存在であるが、島によって言葉が異なっているので呼び名も島々で少しずつ異なっている。奄美大島ではケンムン、沖縄本島中南部ではキジムナー、沖縄本島北部ではブナガヤ、シェーマ、カムラグワーなどと呼ばれている。

沖永良部では、木の精を見たという話より、昼寝の最中にお腹に乗られたという話が多い。睡眠中、特に昼寝の最中に子供や小動物の姿で現れ、人の体に乗る、金縛りのような状態になり身動きできなくなるという。そのことをヒヌムンにウサユン（圧迫される）という。筆者は、2015年8月にFさん（75歳）から体験談を聞いた。Fさんは沖永良部島の中学高校と同級生だった友人の母である。10年ほど前、Fさんは葬式からの帰り、疲れて親戚の家で昼寝をしようと、うとうとしていた。その時のことを、彼女の言葉で表現すると、「玄関からさらさらと誰かが入ってくる感じがしてね、みんな寝ているのに誰だろうと思っていたら、ずんとおなかに乗られて、身動きできなくなったのよ。苦しくて、でもちょっとしたら、さーっといなくなったみたいで、動けるようになったのよ。」と語ってくれた。庭には大きなガジュマルの木があり、「ヒヌムンに押されたんだな」、と思ったのだという。

この話を聞き、岩田慶治の記述を思い出した。彼は現地の人々の考え方に身を寄せる文化人類学の手法により多くを探求しているが、カミについて以下のような体験を記している。

彼が東南アジアでのフィールドワーク中、ともに歩いていた村人が突然押し黙り、「あの木の、あそこの葉の茂みにカミがいるというのである。木のカミなのである。サラサラと心地よい音を立てて流れる川に直面して、そこに川のカミがいるという」「出逢いの驚きと、その時の異様な体験、しかもその異様なものの姿に直面した時のなんとも不思議な親しさとやすらぎ。そのときの大きなもののなかに包まれている感じをカミと呼んだのである」(岩田1984:245-246)と述べている。ここでいうカミとはタイやラオスでいうピーのことで畏怖や驚愕の体験がカミであるという。岩田が記述した村人のカミの感じ方が、ちょうどFさんのヒヌムンの捉え方と似ていると筆者は感じた。それは、自然と人間の間に生じる、説明し難い非科学的な感覚である。

木の精霊は、沖縄島中南部ではキジムナーと呼ばれ、最も代表的な沖縄の妖怪として良く知られている。沖永良部とは異なり、キジムナーにまつわる話にも、姿の特徴や性質まではっきりと表れてくる。樹木の精霊が、人格を持ち個性を持ち出すのである。沖永良部島同様、ガジュマルやアコウなど大木に住み、子供のような姿だが、髪の毛は赤く長く、魚の目が好物だとされ、昔話とともに語り継がれている。下に筆者が『日本の民話16 沖縄』集録の「キジムナー」から話を要約し紹介する。

昔、久米島に一人の男がいた。夜になると海に出かけ貝を採るのを楽しみにしていた。あるばんいつものように貝を採っていると、見知らぬ若い男が同じように貝を採り始めた。赤毛でおかっぱの七歳くらいの背丈をしている。毎晩のように会うようになり、その若者からおいしい酒を貰うようになり、そのうち仲良くなった。ところが家を訪ねても教えてもらえず、百年も昔のことをつい昨日のように語る小さな男を不審に思い、ある晩そつと後をつけて行くと、村はずれの一本の古いガジュマルの木の下で姿が消えた。驚いて家に戻って奥さんにそのことを話すと、年とった木にはキジムナーという精がいて、キジムナーに魅入られると魂を抜かれてしまうと。夫婦はそのことを恐れ、キジムナーが夜、海に行き行って男と会っている間にガジュマルの木に火をつけ燃やしてしまうことを相談した。そしてある晩、男がキジムナーと会っている間に、奥さんは、ガジュマルの木を燃やしてしまった。キジムナーは真っ黒焦げに焦げたガジュマルを見て、残念がって髪をかきむしり、しおしおと立ち去って行った。それから何年かたって、男が首里

に出かけた。安里八幡のそばを通りかかると古いガジュマルの木があり、その横に酒屋があった。男は酒屋で酔っ払って、酒屋の主人にかつてガジュマルの木の化け物からうまい酒をごちそうになったことがあると。話をはじめ、木を焼き払ったことを口を滑らせて話してしまった。すると、それまで相づちをうっていた主人が赤毛のキジムナーの顔になった。そしてかまどから燃えさしの薪をとり「わしの木を焼いたのはおまえだったか」とさげび男の目に突き刺した。

この物語は、キジムナーの住処の木を燃やしてしまうという悪行に、報復されたという筋書きである。キジムナーの住処に危害を加えたりしなければ、ガジュマルのある家は裕福になるとも言われており、東北地方の座敷童にも共通する部分がある

またガジュマルやアコウの木は、奄美・沖縄の人々にとって、ただの樹木ではないと筆者は考える。南島の島々では大切な存在である。家屋の周りに取り囲むように植えられているガジュマルやアコウは、大きく横に広がり、しなやかな枝は台風の高風にも折れずに家屋を守り、強い日差しからは日陰をつくる。このような生活に密着した人々の役に立つ樹木に精霊の存在を認めるようになるのも不思議ではない。そこから派生した木の精の性質や物語は人間の遊び心も含まれるかもしれないが、沖永良部島に昼寝の最中の金縛りの原因をヒヌムンに帰するのは、筆者は島民の生活習慣とも関連していると考え。農業が主産業である同島では、昼食後の昼寝は一般的である。暑い日中の農作業を避け、早朝と夕方の暑さが和らいだ時間帯に作業をすることが多いので、最も暑い時間帯は昼寝をすることが多いのである。その時、家の中よりも庭先の本陰や縁側の方が、風が通り涼しいので、ガジュマルの木の下はかっこうの昼寝場所になる。ガジュマルの木下の涼み台で昼寝の寝入りばなは、農作業の疲労からくる金縛りの状態も珍しくはないであろう。その状態と、最も気温の高い時間帯に、木陰に吹く風に、ヒヌムンの存在を見出すのではないだろうか。金縛りとヒヌムンが結びつき、このような物語になったのではないかと筆者は推測する。

V 人間の魂からカミへ

次に人間の靈魂が発展した状態を考察する。

沖永良部島では、「カミ様」と言う時は「祖先神」を指している場合が最も一般的であろう。このカミ様は、初めからカミ様だったのではない。人の死後の魂すなわちマブイが丁寧な供養された33年後ようやくカミとなる。つまり、祖霊が祖神となるのである。

人が死ぬと、個人の魂は、葬式、初七日、四十九日と供養が続き、年忌祭（一年、三年、七年、十三年、十七年、二十五年、三十三年）ごとに供養される。その他にも年中行事として、お盆、墓正月（1月16日）をはじめ、島の人々は少なくとも一か月に数回はお墓を訪れ、墓地内の草取り、献花など丁寧に供養する。死者の霊魂を悼む儀礼の中で、日本本土ではみられず、奄美・沖縄に特徴的な葬制に第二次葬の風習がある。「洗骨」、または「改葬」とも呼ばれる死者儀礼の一つである。洗骨は近世の風葬時代の名残と考えられているが、近代以降は土葬が普及していたが、1971年に火葬場が建設されてからは火葬が一般的になり、現在は洗骨の風習は廃れているのが現状である。

洗骨は死後、三年程度を基準とし、葬った故人の骨を水で洗い再び納骨する。改葬のことを方言で「チュラサナシユン」（きれいにする）、「ウビオイシユン」（水を差し上げる）ともいい、ウビとは神事に関係する水のことを意味する。埋葬された遺体を親族の男性が掘り起し、女性が骨をきれいに洗う。骨が洗われ、きれいになることで、霊魂はきれいになると考えられ、死霊の状況も安定し鎮められると考えられている。そのため洗骨後の遺骨は、亡くなった人の霊が宿る神聖な骨となるのである。

その後、年忌ごとに死者に対する儀礼が行われ、三十三年忌祭で死者の霊を「天にあげる祝い」、「カミサマになる祝い」として「祀り上げ」ともいわれ、死者儀礼は終わる。なぜなら、個人の霊魂は、個性を失い、一般神の仲間に入るため、天に上るからだといふ島の人はいう。

祖霊がカミとなるめでたい儀礼であるため、三十三年忌は祭りであり、芸能を伴い盛大に行われる。たどれる限りの親族を招き盛大に行うことが良しとされる。前日には墓から霊をお迎えし、供物を供える。当日は饗宴の後、霊を墓に送る際、ジュエテと呼ばれる唄、三線の達人によって、送りの儀式が始まる。フクラシャという祝いの歌で「今日のよき日に祀って差し上げましょう」と始まり、集落の女性による踊りが始まる。家屋内で3曲踊った後は、縁側から庭に出てミンブチ（念仏）と呼ばれる口承の念仏歌を歌いながら列をなして墓まで祖霊を送る。そして最終年忌の三十三年忌祭が終わると、個性を失い一般神となるので、個人の魂の依り代であった位牌は、依り代としての役目を終え処分される。

ミンブチは各集落のジュエテにより口承で伝承されてきたが、そのテキスト、旋律とも沖縄の念仏歌の流れをくみ、その源流には中国、韓国の偽経にも求められるという。しかし、この墓への道行きと冥界への旅を重ね合わせて演じる芸能的展開は、酒井正子によると沖永良部島独自の発想であるという（酒井2009：140 - 141）。

霊魂・マブイが人間の死後、宿る肉体を失い位牌に依

り、子孫の丁重な供養を33年間受け、魂は浄化され異界に行き、祖神となると信じられているのである。三十三年忌祭は、霊がカミとなるための通過儀礼であるということが出来る。

VI 踊りのカミ

次に、「踊り」という芸術的行為の「カミ」について紹介する。踊りのカミ「ウドウイガミ」は芸能が盛んであるという沖永良部島の文化的背景と、アニミズムの観念が結びついて発展した信仰で、ウドウイガミとそれに伴う儀礼は、琉球弧の他の島々で行われているという報告もなく、沖永良部島独自の民俗文化である。

ウドウイガミの「ウドウイ」は沖永良部の言葉で「踊り」、ガミは「カミ」という意味である。ウドウイガミの存在が顕になるのは、「支度直し」と呼ばれる儀礼的行事で、敬老会という高齢者に踊りを披露する行事の次の日に行われる。

支度直しは、現在では敬老会の次の日に行われる。敬老会とは数え年で70歳以上の老人を集落の公民館に招き、踊りでもてなす集落単位で行われる最大の行事である。敬老会が近づくと、この日のために踊り手たちは、毎夜一箇所に集まって踊りを練習する。そして敬老会の前日には「支度見せ」とよばれるリハーサルの役割をもつ催しが行われる。本番の敬老会で踊り、次の日の夜には支度直しが行われる。支度直しをする場所は、踊りの練習をした場所である。練習場所は、その年の集落の世話役当番にあたる組長の自宅、あるいは集落内の広場、公民館などその年の事情で異なる。

敬老会での演技を終えた次の日、いつも踊りを練習していた時間に集まり、会食をする。そして本番と同様の踊り支度でもう一度演じ、踊り納めをする。すべての踊りを終えると、使用された三線、四つ竹、太鼓などの楽器を並べ、踊りに使った衣装を風呂敷に包み、ウドウイガミに支度を直したことをお見せする。この行為が支度直しという名称の由来になっている。踊りに携わった人々は正座をして席につく。次にジュエテ（三線と歌が上手く踊りの指導もできる三線の名手の尊称）が、三線のバチで一人一人に塩を渡す。渡された塩で体を清め、神酒を飲む。そして練習をした場所の四隅に塩と酒をまき踊りの練習場所を清める。その後ジュエテあるいは踊りの責任者がウドウイガミに対して願い事を唱え、この年の敬老会の踊りを終える。唱える際の言葉は集落によって、またジュエテによって少しずつ異なるが、意味は大体似通っている。支度直しという締めくくりの儀式をきちんとするので、今後三線などの楽器の音を出したり、祟りなどのないようにとする旨のお願いをするのである。

筆者が採取した唱え言葉を紹介する。

① 国頭集落 ジューテ：林茂 (1927 [昭和2] 年生) からの聞き取り

「ヒューヌユカヒニ、オハライシーオイシャブントウニ、ウドウイガミサママーヌヤグサグサシミラヌグトゥ、チュラサアラチタボリ。ウドウイシャーヌクワンチャム、ユミアラサシミラヌグトゥシーマモチイタボリ。」(今日の良い日に、お払いをして差し上げますので、踊りの神様この家を荒立てないで、何事もないようにしてください。踊りをした子供たちも、夢を見させて荒立てないように守って下さい。)

② 喜美留集落^{きびる} ジューテ：和田順栄 (1930 [昭和5] 年生) からの聞き取り

「ウリダケ チュラサシタクノーチオイシュントウニヤブリヌアラサヌグトゥ シータボリ。」(これだけきれいに支度を直してさしあげますので、祟りのないようにしてください)

③ 睦布集落^{あぜふ} 責任者：中村スエ (1932 [昭和7] 年生) からの聞き取り

「ウトウイジャサヌクトウシークリリヨ。」(音を出さないようにしてください)

沖永良部島での人々の語りを整理してみると、ウドウイガミの性質にはいくつかの特徴がある。まず、木や石など、ものにはすべて霊があるように、踊りにも霊があり、ウドウイガミはそのような霊的存在であるという。そして、ウドウイガミは、踊りの練習をした場所に憑着する霊であるとみなされている。

このようなウドウイガミの性質は、支度直しに関する禁忌の語りに関連してくる。沖永良部島では、支度直しをしないと、練習を重ねてきた場所にウドウイガミの霊が残り、災いがもたらされると考えられている。国頭集落のジューテである林茂氏や前原広実氏によると、国頭ではかつて踊りの練習は家で行うのが一般的で、踊りの本番後も練習をした家では、ウドウイガミがウロウロし、三線や太鼓の音を出して騒がしくしたり、踊りの夢を見させたりしたという。そのため、練習場所になった家の家族が眠れないで困ったことがしばしばあった。それで、支度直しのお祓いをするのだという。林氏の祖母(江戸末期生まれ)は、ウドウイシャ(踊りが上手で教えられる人)で、自宅がしばしば練習場所となっていた。林氏の祖母は支度直しを行わないと、「三線の音がうるさくて眠れない」としばしば言っていたそうである。このような禁忌の語りから、支度直しは、場所に憑着するウドウイガミの霊を取り除く祓いの役割をもっていること、そして、それが支度直しを行う動機にもなっていることが

わかる。

支度直しを行わないことによって、ウドウイガミがもたらす災いの語りには、大別して二種類ある。一つは、練習場所から「三線や太鼓、四つ竹などの音がいつまでもきこえてくる」という語りで、もっとも頻繁に耳にした。もう一つは、足が悪くなるなど健康を害すると、「支度直しをしなかったから」などといわれるように、厄災の原因とみなされることである。

この二種類の語りの例をそれぞれ紹介しよう。以下は、筆者が現地調査中に、喜美留集落で実際にあったこととして語られていた話である。

1950年頃、喜美留集落の敬老会後の話である。当時は稲の刈り取り後の田で踊りの練習をし、仮設舞台を作り敬老会を行っていた。踊りの中心になっていたのは、青年たちであった。敬老会の踊りの伴奏で、太鼓をうけもった高田実秀という青年は、敬老会の後も毎晩太鼓の音が耳元で聞こえ悩まされ眠れなかった。その後、高田に太鼓を教えた当時の踊りの責任者であった東実文も同様に太鼓の音に悩まされている事がわかった。それを知った青年たちはおかしいと思い、太鼓を探したが簡単には見つからなかった。ようやく敬老会を行った場所の隣の家の床下から太鼓が見つかった。敬老会終了後、誰かが次の日の支度直しに使うため、隣の家の床下においておいたが、支度直しのときに取り出すのを忘れ、そのままになり、支度直しを済ませていなかったのがあった。後日、その太鼓をお祓いするために、支度直しがやり直された。そしてその後、両氏は太鼓の音に悩まされることはなかったという。

このような音が聞こえるのは、限られた人間のみだという。喜美留の70代の女性は、誰もが幽霊を見ることができるとはなく、特別な人だけがみることができるよう、三線や太鼓の音も「聞こえる人には聞こえる」のだと説明してくれた。

また筆者は、支度直しをしないことによってもたらされるもう一種の災いに関して、以下のような話を耳にした。琉球舞踊の教師として活躍していた3人の女性は、一人は足が悪くなり、一人は痴呆症になり、もう一人は亡くなった。かつての踊りの名手の3人の同時期の不幸に対し、数人の高齢者が「支度直しをしないからではないか」と噂をしていた。琉球舞踊は、家元を沖縄におく王国時代の宮廷舞踊の流れを汲む芸能である。沖永良部島では昭和の終わり頃から琉球舞踊教室ができ始め、盛んになっている。しかし、琉球舞踊は、集落ごとに伝承される芸能ではなく、支度見せと支度直しをする習慣がなかった。そのことを指摘しての語りである。

ウドウイガミに関する禁忌や、正式な支度直しの様子は、今でも老人の間ではしばしばきかれるが、支度直し

の儀礼が簡略化しているのが現実である。現在でも儀礼的要素を含んだ支度直しを確認できたのは、畦布集落のみであった。支度直しをしっかりと行っていた頃と比べ、踊りに対する考え方が変わってきていると考えられる。その結果、沖永良部島の人々の生活の中で、踊りというものの優先順位が低くなってきたのである。しかし、踊りの神であるウドゥイガミの観念が人々に肯定されており、現在でも話題にのぼることもある。

Ⅶ まとめ

以上、沖永良部島の人々が言うところの「カミ」をその近接する霊的存在を含めて考察してきた。もう一度、岩田慶治のカミ観念を確認し、考察の手引きとしたい。岩田は『人間、遊び、自然』でカミと神の相違について以下のように記している。カミは、

- (1) 自然と人間との出会いがしらに出現する。その時その場のある種の経験なのである。それを発端のカミといってもよい。
- (2) カミには名前がない。また教義を持たない。したがって、人間にたいして善悪いずれにも働く。
- (3) 出没去来の時を定めない。人間のカレンダーに左右されることはない。

また神については、

- (1) 名前を持っている。したがって、それぞれにしかるべき教義と応分の役割を背負っている。
- (2) 人間の生活リズムにしたがって、出没去来の時が決まっている。春祭りと秋祭りのとき、あるいは正月と盆に降臨するといった時期がある訳である。
- (3) 人間の側からの礼拝・供養に応じて、神は応分のお返しをする。招福除災の機能を果たす。人間と人間はギブ・アンド・テイクの関係で結びつけられているのである（岩田 1986：12-13）。

岩田の定義する「カミ」のグループに相当する言葉には、タイ族・ラオ族のピー（精霊）と人や稲など、現地の人々にとってより重要なものに対して使われるクワン（魂・靈魂）という言葉があり、それはクメール族のカモーイとプルン、マレー語のハントゥーとスマンガットに相当すると述べている（岩田 1986：142）。奄美・沖縄の民俗語彙で人の靈魂を意味する「マブイ」は、クワン、プルン、スマンガットに類似しているが、ピー、カモーイ、ハントゥーに相当する民俗語彙は特にない。奄美・沖縄の人々は、石・岩石に他の自然物より何らかの靈性を認めているようであるが、個性化には至らない。木の精は、ヒヌムン、キジムナーなどと呼ばれ、擬人化、個性化し、カミではなく妖怪に発展した形をももつ。

祖先神は、「マブイ」が子孫の手によって供養され徐々にカミへと推移する過程が確認できる霊的存在といえるが、もちろん一神教や多神教の「神」とは異なり、子孫を守護する民間信仰のカミである。また、ウドゥイガミは踊りのカミであるが、踊りに関する楽器の三線や太鼓の霊・精霊を司る、一段格上の霊的存在とされている。踊りの霊あるいは精霊が発展した推移は確認できず、むしろ人間の重要性に応じ表れた霊格と推測する。仕度直しの起源と考えられる近世末、島が薩摩藩直轄領として派遣藩役人に統治されていた時代に、役人慰労のために各集落に踊りが課され、踊りは非常に重要であった。「献上」された踊りはグムチ（貢物）踊りと言われ今でも古老の話にしばしばあがる。

また、八重山諸島の来訪神であるアカマタ、クロマタのように、名前があり出没去来の時が決まっている来訪神は、岩田の定義では「カミ」ではなく「神」に分類されるが、成立宗教の神ではない。民間信仰における霊的存在でも祖神や踊り神の「カミ」とは異なり、人々に豊かさをもたらす、より大きな存在として万能化している。本稿の限られた事例から言えることは、原初的な霊的存在にも多様性があり、人々にとってより重要な霊的存在は変化、発展あるいは出現することがあり「カミ」と呼ばれ、そのプロセスもカミのあり様も多様であるということである。今後、琉球弧の他の島々のカミガミを調査し、さらにカミの観念を検討したい。

《注》

- 1) 本稿は、2000年以降、継続的に行っているフィールド調査、インタビュー調査、文献資料に基づいている。

参考文献

- 市来美穂 2008「島のハミイシ」『沖永良部島100の素顔』沖永良部島100の素顔編集委員会編、東京農業大学出版会、pp. 122-123
- 岩田慶治 1986『人間、自然、遊び』NHKブックス
- 1989『カミと神—アニミズム宇宙の旅—』講談社
- 折口信夫 2002『古代研究Ⅰ—祭りの発生—』中央公論社
- 酒井正子 1996『奄美歌掛けのディアローク』第一書房
- 2008「ミンブチ（念仏）とジューテ（地謡）」『沖永良部島100の素顔』沖永良部島100の素顔編集委員会編、東京農業大学出版会、pp. 140-141
- 先田光演 2008「トゥールバカ」『沖永良部島100の素顔』沖永良部島100の素顔編集委員会編、東京農業大学出版会、pp. 114-115
- 鈴木正崇 2015「アニミズムの地平」『森羅万象のささやき—民俗宗教研究の諸相—』鈴木正崇編、風響社、pp. 911-928
- タイラー、E. B 1962『原始文化』比屋根安定訳：誠信書房

(1871/1956 Primitive Culture, New York Harper Torch
books)

高橋孝代 2006『境界性の人類学—重層する沖永良部島民の
アイデンティティー』弘文堂

2015「魂の觀念—琉球弧の民間信仰—」『こども教育宝仙
大学紀要』第6号、こども教育宝仙大学、pp.43-49

永吉毅 1981『えらぶの古習俗』道の島社

民話の研究会編 1970『日本の民話16 沖縄』世界文化社

村武精一 1997『アニミズムの世界』吉川弘文館

柳田國男 1956『海南小記』角川書店